

聖書箇所：第一サムエル記 26章 13～25節

説教題：私は罪を犯した

## 1 あらすじ

あるときイスラエルの王であるサウルのところに、ダビデが荒野に隠れていると密告する者が現れました。早速サウルは三千人の精鋭部隊を引き連れ、ダビデを殺そうと出発します。ダビデがその事に気がついたときは、すでに手遅れでした。逃げ道はふさがれてしまい、にっちもさっちも行かない。このままでは全員殺される。そんな状態に追い込まれてしまいました。

ダビデは自分のいのちをかけ、部下であるアビシャイを連れ、夜の闇にまぎれて三千人の部隊が宿営するキャンプの中にもぐ込みます。そしてサウルが眠っている場所を見つける。そのときアビシャイは、これこそまたとないチャンスだから一気にサウルを突き刺してしまおうと進言します。しかしダビデは言います。「主に油注がれた方に手を下して、だれか無罪でおられよう。」

そう言ってから、サウルの頭のところに置いてあった槍と水差しを持ち、敵の陣地から脱出していきます。きょうはその続きとなります。

## 2 ダビデの訴え

### (1) 「盗んではならない」？

ダビデは東の空が白み始めた頃、谷を隔ててサウルの側近であるアブネルに向かって叫びます。16節。「おまえのやったことは良くない。主に誓って言うがおまえたちは死に値する。おまえたちは主君、主に油注がれた

方を見張っていなかったからだ。今、王の枕元にあった王の槍と水差しが、どこにあるか見てみよ。」そう言って、サウルのところから奪ってきた槍と水差しを高々と掲げます。

さて、このダビデのこのことばはちょっと不思議です。というのは、ダビデはサウルの槍と水差しとを無断で持ち出したのです。自分が盗んでおきながら、盗まれたのはおまえがよく見張りをしていなかったからだ。とダビデが居直っているように聞こえてしまいます。

それに、なんとと言っても「盗んではならない。」という律法がある。あれはどうなるのか。

ひとつひとつ考えましょう。ダビデは盗んだと言えるのでしょうか。本当に盗んだというのなら、わざわざ盗んだ相手に見せるはずはありません。ダビデは、このあとできちんとサウルのところに返しています。盗んだものではありません。

### (2) 槍と水差しを持ち出した理由

ではダビデはなぜサウルの槍と水差しとを取っていったのでしょうか。ある目的がありました。もう一度16節を読みましょう。「おまえのやったことは良くない。主に誓って言うがおまえたちは死に値する。おまえたちは主君、主に油注がれた方を見張っていなかったからだ。」

ダビデはだれを責めていますか。私たちはサウルを責めるはずだと予想していました。

ところがダビデが責めているのはサウルではなく、サウルの側近のアブネルです。その理由はこうです。「おまえは油注がれた方を見張っていなかったから。」19節の途中にもこうある。「もし私に刃向かうようにあなたに誘いかけられたのが主であれば、主はあなたのささげ物を受け入れられるでしょう。しかし、それが人によるのであれば、主の前で彼らがのろわれますように。」

ダビデ見ようとしているのは、この問題はなぜ起きたのか、です。主がダビデを殺そうとサウルをそそのかしたというのなら、だれも責任は問われぬ。しかし、もしだれかサウルをそそのかす者がいて、それでダビデを殺そうという者がいるなら、その者がのろわれなければならない。具体的に言えば、それはサウルに仕えている將軍であるアブネルだと言うのです。アブネルはサウルを支える役目があるのに、その役目をきちんと果たしていない。サウルを見張っていなかった。ダビデはその証拠として、サウルの枕元にあった槍と水差しとを空高く掲げます。ダビデがサウルの槍と水差しとを持ち出したのには、このような理由がありました。

しかし、どうでしょうか。私たちはダビデの言い分を聞いて納得できるでしょうか。アブネルが悪いと言っているけれど、どう見ても悪いのはサウルではないか。そう言いたくなります。この問題のもとをたどって行けば、サウルがダビデを殺すと言い出したのが始まりなのです。悪いのはサウル。それはだれの目にも明らかです。

それなのに、どうしてダビデはサウルを責めないのでしょうか。ダビデのやり方はなんだか不自然にさえ感じてしまいます。

(3) 主に油が注がれたという事実の重み

この問題を解く鍵は、ダビデの次のことばにあります。23節の途中です。「私は、主が油注がれた方に、この手を下したくはありませんでした。」

確かにそうなのです。サウルがまだ若くて父親の下で働いていた頃にさかのぼるのですが、ある日、サウルは主に見いだされてイスラエルの王となっていきます。その証拠として当時の祭司であったサムエルの手で油を注がれていたのです。

あれから何十年も経ちました。最初は忠実に働いていたサウルでしたが、途中から様子がおかしくなります。主により頼むのではなく、自分の判断でいろいろなことを勝手にやり出す。

そのとぼっちりを受けたのがダビデです。彼はサウルにどれだけつらい目に遭わされたか。どれだけ屈辱を味わい、煮え湯を飲まされてきたか。こんなこともありました。ダビデが困っていたときに、いのちを助けてくれた恩人がいました。その恩人はダビデをかまくったという濡れ衣を着せられ、サウルの手で殺されてしまった。それも一族全部皆殺しです。肉体的にも精神的にもぼろぼろになるくらいつらい目に遭ってきたのです。

それだけひどいことをした人なのだから、ダビデが槍で一気にサウルを突き刺しても何も問題がない。私たちは思います。しかし、ダビデは絶対にそうしようとしません。

ダビデはとことんこだわっています。「私は、主が油注がれた方に、この手を下したくはありませんでした。」

ダビデはこう考えているのです。サウルがどんなに悪事を働こうともです。サウルがどんなに理不尽なことをダビデに繰り返そう

とも、主がサウルに油を注を注いだという事実は絶対に変わらない。ダビデはそう考えている。

(4) 主もサウルのことを後悔した、それなのに

では神はサウルのことをどのように考えておられたのでしょうか。15章11節にこうあるのです。「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ。」

このことばにはちょっと驚いてしまいます。神は全知全能の方であって、サウルが将来何をするのか知らなかったのか。いいえ、知っていたはずです。知っていたのにサウルを選び、油を注いだのです。

それなのに、どうして主はサウルを王に任じたことを悔いるとわざわざ聖書に記したのでしょうか。主がサウルのことを見抜けなかった、というのなら、こんな都合の悪い事実はありませんから、聖書から即刻削除されなければならない文章です。しかし聖書は堂々と記します。

主ご自身が後悔するほど、サウルがひどいことをしたとしても、油を注いだという事実は取り消すことができない。そのことを私たちに伝えたいのです。

3 イエス・キリストの救いは絶対に失われない

いったいそのことが私たちとどんな関係があるのでしょうか。ダビデとサウルのことは、主イエス・キリストと私たちの関係をそのまま表しているからです。

私たちは恵みによって、人生のあるとき、主に会いました。この方こそ救い主である

と告白し、罪を告白し、救いを受け入れました。そうやってバプテスマを受けました。

問題はその後です。信じた私たちは、そのあとひとつも罪を犯さなかったのでしょうか。きよく正しく生きてきたのでしょうか。とんでもありません。むしろ罪だらけです。バプテスマを受けたときは、自分はきよくなったかのように思えたけれど、あれは錯覚でした。今は、自分のうちに真つ黒な罪があると云わざるを得ない。

サウルはこう言っています。「私は罪を犯した。ほんとうに私は愚かなことをして、たいへんな間違いと犯した。」サウルのことばはほんとうだったでしょう。心から思っこんなふうで告白したでしょう。でもサウルは前にも同じことを告白していたのです。私は罪を犯したと言いながら、ほとぼりがさめるとまたダビデを殺そうとしていった。

私たちはどうですか。私たちだって同じではないですか。サウルのことを責める資格がありますか。罪を犯しましたと言いながら、同じ罪を繰り返してしまう、そんな自分ではないですか。そうしたらどうなるのでしょうか。悔い改めをしておきながら、同じ罪を犯したというのですから、もう赦しません。ただちに、救いは取りあげられるのでしょうか。

ダビデは何を見ていたか。サウルがどんなひどいことをしようとも、主に油注がされたという事実は主でさえも取り消すことができない。そこを見ていた。

それと同じように、私たちが一度救われたというのなら、たとえ私たちが罪を繰り返したとしても、救いは絶対に失われることはないのです。

今日の箇所、理解に苦しむようなダビデの行動に見えました。しかし、実は罪を繰り返

す私たちにとって、実に恵みの箇所であることがわかります。

みなさんは苦しんでいたのではないでしようか。救われて、罪を告白し、悔い改めたのに同じ罪を繰り返してしまう。こんな私を見てイエスは悲しんでおられる。私の救いは取りあげられるかもしれない。こんな私は天国には入れない。

そんな心配は無用です。恐れる必要はありません。私たちは罪を犯したらそのまま、何度でも主に告白すればよいだけなのです。主の救いが私たちから失われることは絶対にありません。主の救いが確かであることを覚えて、主の御名をあがめたいと願います。